<http://voices.yahoo.com/bitcoin-20-explained-colored-coins-vs-mastercoin-vs-12475857.html?cat=15>

# ビットコイン2.0の解説：カラーコイン Vs マスターコイン Vs オープン取引 Vs プロトシェア

## 2014年は、ブロックチェーンが真価を発揮する年です

[yle Torpey](http://contributor.yahoo.com/user/1816335/kyle_torpey.html)

[Kyle Torpey](http://contributor.yahoo.com/user/1816335/kyle_torpey.html),

世界ではビットコイン決済ネットワークの底力がようやく理解され始めている段階ですが、舞台裏ではビットコインプロトコルの真のイノベーションが起こっています。ビットコインプロトコルをただの支払以外の方法で利用し、権力分散型の交換システムの設立という究極の目的について語るビットコイン愛好家が多数存在しています。2014年は、そうした機能がようやく実世界のアプリケーションで実装される年になりそうです。ビットコインを次の段階へ進化させようと試みるプロジェクトが多数存在しているため、全て片がついたときには明らかな勝者がたった一人存在している、という事態はどうやらなさそうです。競争について語る前に、こうしたプロジェクトが何をやろうとしているのか、よく見てみましょう。

**インターネットの権力を分散させる**

2013年にビットコインについて初めて耳にした人々のほとんどは、ビットコインをただの通貨とみなしています。しかし、現実は、ずっと複雑です。ビットコインはその本質において、中央から第三者に取り仕切ってもらうことなく、誰が何を所有しているかを世界中で合意させることができる新規技術です。この技術の上に構築できるアプリケーションは多数あるため、ビットコインは、この後にも続くであろうアプリの一種にすぎません。

ビットコインのことを一旦忘れて、技術のみに注目すると、いろいろな新しい可能性が目に映るはずです。たとえば、誰がどの資産を所有しているかを記録した権力分散型の台帳があれば、中央統制型の株式市場なんていらなくなるのではないでしょうか？誰がどのドメイン名やメールアドレスを所有しているか、世界中で合意ができれば、こうしたサービスをバージョンごとに一元管理する必要がなくなるのでは？売り手と買い手が権力の介入無しにお互いを見つけられるグローバル市場が作れるのならば、eBayを使い続ける必要もなくなるのでは？これらは、ビットコインを動かす技術について人々が注目している可能性のうちほんの一部です。支払だけに用途を限定するものではありません。

**カラーコイン**

始めに開発が着手されたBitcoin 2.0プラットフォームの一つは、カラーコインです。最近になってアルファ版である [Chromawallet](http://chromawallet.com/)がリリースされました。プロジェクトの開発者は、クライアントの軽量版を数週間以内に完成できる見込みです。

この特殊財布サービスでなにが出来るのでしょう？カラーコインの元となる考えは、ビットコインのブロックチェーン内で特定のビットコインに二次特性を付加できるようにする、というものです。この二次特性は、実世界にて裏づけされた全く新しいデジタル通貨を生み出すために使えます。例えば、家庭内に金を保有しているとしましょう。仮に、5サトシ(0.00000005 BTC)を取り出し、各サトシが所有している金塊の1グラムに相当する、と宣言したとします。すると、この5サトシは5グラムの金によって裏づけされ、それぞれChromawallet（財布サービス）内の分散型交換所内に置かれます。つまり、ビットコインを瞬時に金、ドル、ユーロ、あるいはChromawallet内に存在するあらゆる通貨と交換できるようになった、ということです。

別の、おそらくもっと刺激的な例は、カラーコインを用いてブロックチェーン上の企業にて株式を発行する可能性です。この状況においては、1000サトシ（あるいは会社内に置きたいだけの額）を持ち出し、この1000サトシは新会社の株式一株に相当する、と宣言できます。

今後2-3年において、 [カラーコイン](https://www.youtube.com/watch?v=fmFjmvwPGKU)プロジェクトは、ビットコインという基礎の上に構築される機能として、素晴らしいきっかけになるでしょう。

**マスターコイン**

[マスターコイン](http://mastercoin.org/) プロジェクトはカラーコインと似ていますが、目的の達成方法が異なります。マスターコインプロジェクトは、カラーコインプロジェクトに含まれる多くの機能を開発するために、2013年8月に発足しました。

初のマスターコインは、初期投資家が自身のビットコインを特定のビットコインアドレスに送金した際に生まれています。彼らのビットコインは、マスターコインに変換された後、そのまま彼らへ戻されています。マスターコインはビットコインの上に構築された新しいプロトコルレイヤーです。つまり、マスターコインとは、特定の特性を備えたビットコインの一群、と言えます。

マスターコインを通じて開発されている興味深い機能には、分散型の賭博取引所や、 [差金決済取引](http://wiki.mastercoin.org/index.php/Contract_for_difference) を用いて実体のある担保や第三者に頼ることなく通貨を創り出す試み、などがあります。マスターコインプロトコルについて指摘しておかなければいけないのは、マスターコインのレイヤーにはビットコインとは異なる独自の特性もある、という点です。つまり、マスターコインは変造貨幣でもあります。

マスターコインプロトコルに追加されている機能には興味深いものがあります。例えば、預金口座内のマスターコインにマーキングを施せば、アドレス所有者の許可無く行われた支払を取り消すことができる、などです。マスターコインの問題は一つだけであり、ビットコインと競合する、という点です。マスターコインとビットコインは直接競合しない、と繰り返し強調されていますが、現実にはマスターコインプロトコルの機能を利用しようとすれば、ユーザーは手持ちのビットコインの一部をマスターコインに変換しなければいけません。マスターコインプロトコルに組み込まれた機能の多くがビットコインに直接組み込まれていれば、ビットコインからマスターコインに切り替える必要なんてないはずです。ビットコインに比べてマスターコインの長所が際立っていないのであれば、皆はマスターコインではなくビットコインを使い続けるでしょう。ビットコイン価格の方が、安定するはずだからです。

世界中のビットコイン価格総額は100億ドル近辺で推移しています。マスターコインの総額は1億ドル以下に落ちました。通貨の生存率を見極める上では、流動性が大きな鍵を握ります。マスターコインの先進的な機能をもって、流動性の点で優位に立つビットコインを凌駕できるでしょうか？興味深い点です。いずれにせよ、マスターコインプロトコルに実装されている先進的な機能は、世界中に恩恵をもたらすでしょう。

マスターコインは、ビットコインと同様に、当初は理解しにくい技術です。良い知らせもあります。過去2-3ヶ月にわたって、マスターコインの取締役であるRon Grossが [YouTubeビデオにて](https://www.youtube.com/results?search_query=ron+gross+mastercoin&amp;sm=3) 各種インタビューや講演でマスターコインの最も重要な機能を説明してきました。

**オープン取引**

[オープン取引](http://opentransactions.org/wiki/index.php?title=Main_Page) はビットコインが話題になる前から開発が進められてきたプロジェクトです。プロジェクト開発を指揮するChris Odom（FellowTravelerとも呼ばれています）は、金で裏づけされたデジタル通貨、を念頭においてオープン取引の基礎となるアイデアを構想していました。ビットコインが発展するにつれ、オープン取引は自然な流れで、ビットコインに組み入れられるようになりました。

オープン取引プロジェクトの主な目標の一つは、誰でも暗号化によって保護された通貨や各種金融資産を発行できるようにして、金融システム全体を分散型にすることです。オープン取引においては、どんな人でも、実体価値を持つデジタルトークンを発行できます。しかし、このシステムの最も革新的な機能は、デジタルトークンを発行した人々であっても、自身の通貨や株式に有利なように台帳を変更することはできない、という点です。例えば、ペイパル社がサーバーにアクセスして、ユーザーの残高を$11,873.33から$4,902.34に変更することは、その気になれば技術的には可能です。こうした行動はオープン取引を通じて発行された資産では不可能になります。取引が処理され、署名されるプロセスが、そうした活動を禁止します。もちろん、通貨を金銀やドルや他の資産で裏づけするサードパーティが実際に資産を保有していることを信頼できるかどうか、という問題は残ります。

明るい知らせもあり、この問題の解決法が最近見つかっています。つまり、通貨の発行者は、通貨を発行することに加えて、ビットコインの形式で自身の通貨の担保を保持することができる、というものです。例えば、1オンスの金によって裏づけされた通貨があれば、その通貨の発行者は1オンスの金に相当するビットコインを第三者預託口座に入れ、「取り付け騒ぎ」が起こった際には通貨の保持者に対してその通貨を配布する、と同意することがあり得ます。

オープン取引についてのさらなる情報は、こちらがお勧めです。 [Chris Odomのインタビュー](https://www.youtube.com/watch?v=HSgpStCTw2g) と [分散取引所についての座談会](https://www.youtube.com/watch?v=hwyZ7ZgCq_o). [Let's Talk BitcoinにおけるOdomのインタビュー映像](https://www.youtube.com/watch?v=vtJcUM5-TeA) もどうぞ。異なるサーバー同士で取引を行うために、オープン取引にBitmessageを組み入れることについて語っています。

**プロトシェア**

マスターコインと同様、プロトシェアは変造通貨です。ただし、ビットコインのブロックチェーンをただコピーするのではなく、別の価値を提供できるため、話題を呼んでいます。プロトシェアの基本となる考えは、プロトシェアを保有する人は誰でも、Invictus Innovationsが設立した分散型の自治企業の株主になるという点です。

最初のプロジェクトである [Bitshares](https://www.youtube.com/watch?v=5BV55IrZi7g)は分散型取引所の設立にまつわる課題を独自に解決しようとする試みです。彼らの解決方法は、マスターコインも実装しようとしている差金決済取引のアイデアに似ています。

BitUSDやBitGoldのような資産は、対象の資産に対して買い持ちと売り持ちの立場を取る二つのBitshares所持者から価値を得ています。Bytemasterから [BitAssetsがどうやって価値を得ているか、](https://bitcointalk.org/index.php?topic=313873.msg3373956#msg3373956) Bitcointalkフォーラムにて見れます。Bytemaster（Daniel Larimer）はInvictus InnovationsのCEOです。BitSharesの準備ができ次第、Invictusは次にDomainSharesなど、多数の分散型自治企業の設立に着手し、今日私達が利用している中央集権型のオンラインサービスにとって代わろうとするでしょう。

**分散型の自治企業**

「分散型の自治企業」がプロトシェア界隈で語られるのに気がついた人もいるでしょう。DAC、または分散型自治企業とは何でしょう？DACはビットコインのブロックチェーン技術を用いて分散型サービスを作成する方法です。例えば、技術面から言うと、ビットコインは、初めて作られたDACとも言えます。ビットコインを管理する中央当局は存在せず、ビットコインという企業がどう活動していけばいいのかを中央から決定する人たちも必要ありません。

Namecoinも、分散型自治企業の一例です。この変造通貨に注目すると、分散型自治企業のコンセプトをより簡単に理解できます。Namecoinは.bitドメインの登録を行う分散型サービスです。彼らはメールとオンラインIDに関しても同様なサービスを開発中です。Namecoinは.bitドメインの購入を行えるようにするためのツールであり、Namecoinの開発者や初期導入者が利益を得られるようになっています。Namecoinを保持する人々にも、Namecoinを普及する動機があります。保有するNamecoinの価値が上がるからです。利益が得られないと、今後出現するであろう分散型のサービスの多くは、長期間の活動を維持できないでしょう。

今後、フェースブックやツイッター、Gmail、オンラインのスポーツギャンブル、投票所、SSL、クラウドストレージなどに対して分散型の代替サービスを提供するDACが数多く出現するでしょう。

**誰が勝利を手にするのでしょう？**

結論を言えば、こうしたBitcoin 2.0技術はお互いに競争しているわけではありません。オープン取引によりプロトシェア、マスターコイン、ビットコイン、その他サーバー上の全てが取引可能になります。BitMastercoin用のマスターコインを用いて、プロトシェアにより裏づけされた通貨を取引できるようになる日だって、訪れるでしょう。

こうした新規分散型サービスや技術が生まれることは、人間性の勝利につながります。私たちは、サトシ・ナカモトがブロックチェーン技術を作り上げてくれたことに、感謝しています。2-3年後には、インターネットが全てブロックチェーンを開発の基礎とする技術によって置き換わる状況について議論を交わしている可能性だってあるでしょう。

著者： [Kyle Torpey](http://contributor.yahoo.com/user/1816335/kyle_torpey.html)

*Email: kyletorpey@riseup.net Twitter:@kyletorpey 略歴：KyleはCryptoCoinsNews.comの編集長です。彼はBitcloudの一般向け白書を記述しており、破壊的な特性についての本を記述している最中です。*[プロフィール](http://contributor.yahoo.com/user/1816335/kyle_torpey.html)